



👁️👁️ みどころ

映画は脚本が命！第1回「松田優作賞」のグランプリ脚本を得て、今が旬の女優・安藤サクラが主演女優賞確実と思えるすばらしい演技を！前半にみる、『もらとりあむタマ子』（13年）のタマ子（前田敦子）との怠惰さでの勝負は、圧倒的に安藤サクラの方が上。後半は、ボクサー・一子の体型の変化と意志力の変化に注目！これを10日間で実現したのは、驚異的な女優魂だ。

そして、クライマックスの試合は演出？それともドキュメント？こりゃ必見！本作のメッセージと感動を、今ドキの若者にしっかり伝えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■映画は脚本が命！第1回松田優作賞グランプリに注目！■□■

近時の邦画は原作モノが多い。また、その原作も骨太の歴史小説や社会ドラマ・人間ドラマではなく、コミック本や単純な純愛小説が多い。しかし、映画は脚本が命。「これぞ映画用の脚本！」と思えるものがあれば、テレビドラマの延長ではない、ホンモノの映画が撮れるのに……。そう思っている監督や映画人は多いはずだ。

そんな中で生まれた本作は、第1回「松田優作賞」グランプリを受賞した足立紳氏の脚本をもとに、武正晴監督が映画化したもの。「松田優作賞」はその冠名のとおり、故・松田優作氏の出身地である山口県の周南映画祭において、優作氏の志を受け継ぐクリエイターを発掘すべく、201



(C)2014 東映ビデオ

2年に新設された脚本賞。そこに国内外から寄せられた151もの作品の中から見事グランプリを獲得したのが、足立氏の『百円の恋』。そして、本作で見事な演技をみせるヒロイン(?) 斎藤一子を演じた安藤サクラは、オーディションの結果選ばれたものだ。



このように、本作はそもそも作品作りへの熱意が、人気の原作モノにイケメンの美男、美女を配して定番のストーリーでアベックの若者たちにポップコーンを食べながら観てもらおうという今ドキの邦画作りの路線とは全く違うわけだ。さあ、まずはそんな脚本に注目し、かつ期待しよう。

■タマ子の怠惰ぶりは?前田敦子の魅力は?■

吉田大八監督の『紙の月』(14年)では、第27回東京国際映画祭で最優秀女優賞を受賞した宮沢りえの力演と力走(?) ぶりが光っていたが、同時に2013年大晦日の『紅白歌合戦』で引退宣言をしたAKB48のセンター、大島優子の助演女優ぶりも光っていた。他方、AKB48で大島優子の先輩としてセンターを張っていた前田敦子の女優としての開眼ぶりの見事さは、『もらとりあむタマ子』(13年)『シネマルーム32』125頁参照)を観てよくわかった。

「不機嫌は若い女の子だけに許された、専売特許的な魅力」らしいが、そこでみせた女優・前田敦子演ずるタマ子の、実家で食べて、寝て、マンガを読んでいるだけのバカ女ぶりはお見事だった。そのチラシに踊る文字は「坂井タマ子23才 大卒 ただ今、実家に帰省(寄生)中」だったし、スウェットスーツを着て立っている姿はいかにも怠惰そうだった。それでも前田敦子は根が美人だけに、まだ少しキリリとした部分が残っており、そのアンバランスさがまた魅力だった。

■タマ子VS一子、前田敦子VS安藤サクラ■

それと比べても、本作冒頭から前半のストーリーにみる安藤サクラ演じる32歳の女・斎藤一子の怠惰ぶりはすごい。パジャマ姿(?)でソファに座ってお尻を掻いている姿、パジャマ姿(?)のまま堂々と外に出て百円ショップを徘徊する姿、ノロノロと起き出し、寝ぼけ眼のままで食卓に座り、新聞を広げる姿。タマ子の怠惰ぶりにもビックリさせられたが、本作にみる一子の怠惰ぶりはそれ以上、1枚も2枚も上手だ。それを助長させてい



(C) 2014 東映ビデオ

るのが、一子の長い髪。女性の長い髪は本来美しいはずだが、一子のそれを見ると、とにかくうとうしいのひとこと。そのうえ、幸か不幸か安藤サクラは前田敦子ほどの美人ではないうえ、この役のためにしっかり体重コントロール（増量）をしているから、何よりもそのための肉体が怠惰ぶりを増長させている。

したがって、タマ子VS一子の怠惰ぶりは、やはり一子の方が上。さらに、

その怠惰ぶりを観客に説得する女優としての力量でも、前田敦子VS安藤サクラは、やはり安藤サクラの方が上。まさに主演女優賞確実！そんな感さえある安藤サクラの演技に注目！

■□■姉妹ゲンカから一人暮らしに！何と32歳で処女！■□■

本作に見る一子の年齢が32歳だということは、後半からボクシングを始めた一子が木下会長（重松収）に対して「試合に出たい」と申し出た時、「年齢制限が32歳までだ」と言われるシーンで明らかになる。冒頭、ソファに座って子供とテレビゲームに興じている一子に次々と「口撃」してくるのは、妹の斎藤二三子（早織）。この冒頭のストーリーの展開につれて、離婚のため子連れで実家に戻ってきた二三子と、弁当店を営む実家で32歳までずっとゴロゴロしていた一子の姉妹仲の悪さが見えてくる。



(C) 2014 東映ビデオ

それまでだって、朝早くから夜遅くまで弁当作りに精を出していた母親・斎藤佳子（稲川実代子）とそれを手伝っている父親・斎藤隆夫（伊藤洋三郎）は、怠惰な生活を続ける一子にイラついてはいたはず。そこに妹が子連れで戻ってきたうえ、妹は懸命に弁当作りを手伝っているのだから、姉の一子に対する「口撃」がきつくなるのは当然だ。その結果起きた、前半に見る一子VS二三子の「姉妹間のバトル」は、あなた自身の目でしっかりと。もっとも、それによって否応なく一子の実家からの巣立ち＝一人暮らしが開始したのはむしろラッキーだったかも。しかして、娘を32歳まで実家に置き、ダラダラ生活をさせてきたのは如何なもの・・・。

■□■百円ショップの労働実態は？その問題性は？■□■



(C) 2014 東映ビデオ



(C) 2014 東映ビデオ

一子が外に出るのは百円ショップへの往復だけだが、その途中にあるのが木下ボクシングジム。そこには、ストイックな練習に励んでいる中年ボクサー・狩野祐二（新井浩文）の姿があったが、なぜか一子はそれが気になるらしい。狩野は百円ショップに行ってもバナナだけを買っていくため、そこで勤めはじめた一子の先輩で、おしゃべりな店員・野間明（坂田聡）は、彼のことをバナナマンと呼んでいた。

2014年には「すき家」の労働実態の異常さが暴露されたのを皮切りに、さまざまな「ブラック企業」ぶりが社会問題になったが、百円ショップで働く野間、佐田和弘（沖田裕樹）、岡野淳（宇野祥平）、西村（吉村界人）らの姿をみれば、そのひどい実態がよくわかる。さらに、

夜な夜な廃棄された焼きうどんを貰いに来るのが元店員のおばさん、池内敏子（根岸季衣）。ここまでのエピソードを入れることの賛否はあるはずだが、彼女が包丁を持った「百円ショップ強盗」に変身する姿をみると、武正晴監督が本作に込めた現在の社会構造のあり方についての批判（皮肉？）がよくわかる。

■□■一子はなぜ、この中年ボクサーが気になるの？■□■

それはともかく、32歳までおよそ男には縁のなかった一子が、なぜ百円ショップの帰り道に見る中年ボクサー・狩野の姿が気になっていたの？それは本作全編を貫く「男女問題」のテーマだからしっかりあなた自身で考えてもらいたいが、一子が狩野に対して心のトキメキ的な感情を抱いていたことはまちがいない。いくらブクブクに太っていても、また、いくら身だしなみに構っていなくても、やっぱり一子は女と



(C) 2014 東映ビデオ

ということだ。狩野からの奇妙なデートの申し込み(?)を受けた一子が、百円ショップで「男を魅了する」下着を購入し、鏡の前でそれを身に付けチェックする姿は滑稽だが、一応その女ゴコロは理解できる。しかし、その「勝負下着」の上に着た花柄のワンピースは、本人は可愛くしたつもりでも、私に言わせればダサさが際立つだけ。こんな女にチョックアイを出すのは、ホントに女に飢えた野間くらいなものでは・・・。

最初で最後の狩野のボクシングの試合を野間と一緒に観戦した後の奇妙な食事会(?)、そしてその後に展開される野間による一子の「強姦事件」に見る一子の女ゴコロをあなたはどう理解?さらに、その後一子のアパートに転がり込んできた(?)狩野との奇妙な同棲生活の展開に見る、一子の女ゴコロをあなたはいかにかに分析?そのしっかりした分析がなければ、その後一子が木下ボクシングジムに入り、懸命に練習に打ち込んでいく「必然性」が読み取れないはずだから、その分析をしっかりと・・・。



(C) 2014 東映ビデオ

■一子の肉体と精神の変身ぶりに注目！女優魂に拍手！■

邦画、洋画を問わずボクシング映画は名画が多い。邦画では、若き日の石原裕次郎の『勝者』(57年)や『あしたのジョー』(11年)、『シネマルーム26』(208頁参照)。洋画では『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)、『シネマルーム8』(212頁参照)や『シンデレラマン』(05年)、『シネマルーム8』(218頁参照)、さらに、シルベスター・スタローン主演の『ロッキー』シリーズが有名だ。プロレス映画でも『レスラー』(08年)、『シネマルーム22』(83頁参照)は、ベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞した名作だ。



(C) 2014 東映ビデオ

しかして、本作後半からクライマックスに向けての見どころは、あの異様なまでに怠惰だった一子のプロボクサーへの変身ぶりとなる。映画のために何kgも痩せたり増量することはよくある。有名なのは、男優では『マシニスト』(04年)におけるクリスチャン・ペイルの30kgの減量(『シネマルーム7』382頁参照)、女優では『モンスター』(03年)におけるハリウッド・ビューティーのシャーリーズ・セロンの13kg以上の増量(『シネマルーム6』238頁参照)。本作で安藤サクラが何kgから何kg

へ増減量したという公式発表はないが、本作をみれば単に何kgという数字だけではなく、体脂肪や筋肉、顔のシャープさ、目の鋭さ、身体の動き、さらに意志力等、すべての面において肉体改造がなされたことがよくわかる。しかも、パンフレットを読むと、本作にみる減量と体型の変化を、たった10日間でやったというからすごい。安藤サクラの女優魂に拍手！

■ロッキー』や公式戦以上に一子のファイトに感動！■

ボクシング映画が面白いのは、2人だけのリング上での真剣勝負に集中できるためだから、結果が勝ちでも負けでもその感動は変わらない。したがって、『ロッキー』でも、ロッキーは常勝ではなく、時には負けて打ちのめされることも・・・。「ボクシングは厳しいよ」が口癖の木下会長は、32歳の年齢制限ギリギリでの一子の試



(C) 2014 東映ビデオ

合出場に反対したが、結局は一子の熱意に押されてリング上での勝負が実現することに。

2014年の大晦日で放映されたボクシングの試合では、①三階級制覇前哨戦&ダブル世界タイトルマッチで井岡一翔がジャン・ピエロ・ペレス（ベネズエラ）相手に第5ラウンドで見せたノックアウトシーンは圧巻だった。②重量級のチャンピオン・内山高志の9度目の防衛戦は、イスラエル・ペレス（アルゼンチン）相手に相当苦労したが、安心してその勝利を観ていられた。そして、③WBA&WBO世界スーパーバンタム級の最強のチャンピオン、ギジェルモ・リゴンドー（キューバ）に（無謀にも？）挑戦した天竺尚が、第7ラウンドで2度もダウンを奪った時はビックリしたが、その後は一方的に打ち込まれ、天竺の左頬の腫れ具合には驚かされた。さらに、④IBF&WBO世界ミニマム級王座決定戦における高山勝成と大平剛のファイトは、軽量だけに動きのスピードにビックリさせられた。

他方、『あしたのジョー』では、ジョーの必殺技(?)のクロスカウンターが決まるか否かが勝負のポイントだったし、『ロッキー』シリーズでは、倒れても倒れてもなお立ち上がるロッキーの姿が感動的だった。しかし、本作のクライマックスとしてスクリーン上で展開される4回戦の展開は・・・？

これは演出？それともドキュメント？その線引きさえわからなくなってしまいそうな一子のファイトぶりと、目を腫らしながら相手と向き合い、白目をむいて倒れこんでしまう一子の姿に注目しながら、その感動をタップリと味わいたい。

■□■一子は勝ち組？負け組？これからの人生は？■□■



(C) 2014 東映ビデオ



(C) 2014 東映ビデオ

私は勝ち組VS負け組という二者択一的な分類は好きではないが、本作前半にみる一子の姿は明らかに負け組としか言いようがない。年齢制限ギリギリまでボクシングに挑戦し、敗れ去った中年ボクサー狩野も、女に寄生する生活ぶり、定職に就かない生活ぶりを見れば、明らかに負け組だ。しかし、もしあの4回戦の試合で一子が勝利していたら、一子は負け組から勝ち組に回ることができるの？いやいや、決してそんなことはないはずだ。逆に、あの試合に負けてしまえば、一子の負け組への帰属は更に定着するの？いやいや、これもそうではないはず。そこらあたりをどう考えるかが難しいところだ。



(C) 2014 東映ビデオ

夜遅く試合会場から1人で出てきた一子を、狩野が1人じっと待っていたのはなぜ？狩野は既に、ちょっとした狩野との幸せを夢に描いていたかもしれない一子の気持を無視して一子のアパートから逃げ出し、他の女と一緒に生活していたのではなかったの？そして、その女と別れた今も、一子と結婚し、正業に就く気など毛頭ないはずだ。なのに、狩野はなぜ今、一子を迎えるためにそこに座っているの？

本作ラストは、狩野の姿を見て「勝ちたかった！勝ちたかった！」と泣きじゃくる一子を狩野が優しく抱きしめた後、「飯でも行くか」と言って2人手を繋いで歩いていくシーンになる。しかし、これがその後の安定した生活に結びついたり、2人して負け組から勝ち組に変わっていくこと

に結びつくものではないことは明らかだ。百円ショップで働く男たちは一見まともそうだった店長も含めてみんな将来の展望のない負け組ばかりだが、ラストにみる狩野と一子の2人にも何の展望がないことは明らかだ。ボクシングで勝つことも難しいが、社会で(勝ち組として)生きていくことは、もっと厳しいわけだ。そんな現実の中、さて2人のこれからの人生は・・・？

2015 (平成27) 年1月14日記